

第1部 エッセイ

テーマ「おむすび」

一般の部

佳作

母がむすんだおむすび

新井 洋一

洋装店に夫婦住み込みで働く母は忙しかった。レジを閉めて二階の六畳間に戻るのは夜八時を過ぎていた。仕出しの夕食を済ませた私と弟は寝息を立てている。行商の父はまだ帰らない。あの頃の我が家には一家団欒の余裕はなかった。翌朝は暗い内に父を見送り、磨り減った洗濯板で家族の衣類をゴシゴシと洗う。泡立った盥の水を流し、手早く洗濯物を干す。ジュウジュウ。ガスにかけた羽釜が噴き出す。住居部分の一階は従業員さん達と共用だった。急いでお勝手に戻るとガスを止め、子ども茶碗にご飯をよそおい、店に向かう。

おかずはいつも味噌汁と玉子焼きだった。「かあちゃん、腹空った。なんかない？」小学校低学年はいつも腹ペコだ。ランドセルを部屋に放り出すと母の所に行っておやつをねだる。「ちよつと、お願い」。母は困った顔を見せると近くにいた従業員さんにレジを交代して貰う。足元で遊んでいた四つ下の弟をおんぶ紐で背負うと一緒にお勝手へ向かう。でもお勝手に食べ物は何も無い。羽釜に「吹きこぼれ」が白く張り付いていた。「これを食べてごらん。美味しいから」。薄い煎餅の様な「吹きこぼれ」を剥がして差し出す。口にするけれど腹の足しにはならない。「困ったわねえ」。母はそう言ってお釜の底を覗く。朝食の残りご飯がこびりついている。それをしゃもじでゴリゴリと削ると、手で無理やりに包み込む。固い「おこげおむすび」の出来上がりだ。「これで、どう?」。手渡されたむすび損ないのおむすびは掌からポロポロとテーブルにこぼれ落ちる。それを一粒ずつ拾って口に入れる。陽気が立つ炊き立てごはんを握ったおにぎりは美味しい。けれど空っ腹にはこげ臭くて歯応えのあるおむすびだっただけ。忙しいかあちゃんがむすんでくれたんだか

ら。見守る母が微笑んでいる。こぼれ出るご飯一
粒一粒に子どもへの思いが込められていた。
ご飯のうまさほろほろこぼれ 種田山頭火
母のおむすびには美味しい切なさがある。